

4. 1 教育（地方創生を担う人材育成）について

(1) 観光・地域創造関連科目の実施～地域連携・創生演習（教養講義 VI）～

大学において地域で活躍する人材を育成し、地元での定着を向上させるためには、学生が奈良県内の地方公共団体・企業等の現状や求められる人材像についての理解を進め、地元で働くことに興味関心や魅力を感じる必要がある。そして、学生自身も採用に至るために地域人材としての能力を高めなければならない。「地域連携・創生演習」（教養講義 VI）ではこれを推進すべく、奈良県内の地方公共団体や企業等と連携することで、その現状や魅力について理解を進めた。また、学生はチームを組んで PBL（Project/Problem Based Learning：課題解決型学習）型の授業に参加し、地方公共団体・企業等が抱える経営課題について具体的に取り組み、解決策を提案することで、地域人材としての能力の涵養を図った。また奈良県内の地方公共団体・企業・大学（いわゆる産官学）のゲスト講師の講演を通じて、学生は奈良で働くことを自分のキャリアの問題として考える機会を持った。「地域連携・創生演習」（教養講義 VI）は後期授業として開講し、1年次 42名、2年次 8名、4年次 3名の計 53名が履修した。

授業では、①担当教員（本学特任准教授・増本貴士）による授業、②PBL での課題解決、③ゲスト講師による講演の 3つを組み合わせ、下記の表 1 のとおり実施した。

表 1 令和元年度の授業実施内容

	日付	授業実施内容
1	10月2日	はじめに～求められる人材像、課題解決提案の作り方・考え方等～
2	10月9日	各企業のご担当者様から課題発表（4社、各20分説明とQ&A10分）
3	10月16日	奈良の今を知る①（学：奈良女子大学の教員による講義）
4	10月23日	奈良の今を知る②（産：県内の老舗企業の経営者による講演）
5	10月30日	奈良の今を知る③（産：県内のシンクタンク研究員による講演）
6	11月6日	これまでの授業のフォローアップ①（課題の整理、解決提案作り）
7	11月13日	課題解決策の中間報告プレゼンテーション
8	11月20日	奈良の今を知る④（官：下市町職員による講演）
9	11月27日	奈良の今を知る⑤（官：十津川村職員による講演）
10	12月4日	グループ討議 基礎的な知識、効果的な手法、評価の方法、実践等
11	12月11日	これまでの授業のフォローアップ②（課題の整理、解決提案作り）
12	12月18日	各班の課題解決策への年末指導
13	1月8日	奈良の今を知る⑥（学：奈良工業高等専門学校の教員による講演）
14	1月15日	課題解決策の最終報告プレゼンテーション① （奈良交通株式会社、一般社団法人吉野ビジターズビューロー）
15	1月22日	課題解決策の最終報告プレゼンテーション② （ホテル葉風泰夢、社会福祉法人ぶろぼの）

担当教員による座学では、学生達は「社会人基礎力」や「地方創生」を手掛かりに自分自身の「キャリア」を考察し、また、6名のゲスト講師による講演では、奈良県内の具体的な事例に触れることで、地域人材としての自分のキャリアについて考える機会を得た。

これを踏まえて、PBLでの取り組みを実施した。参画企業・団体から提示された課題の解決策の作成はグループで取り組むこととした。学生チームはフィールドワークの実施、企業・団体との質疑応答、中間報告会での報告などを通じて、検討を進め、最終報告会にて課題解決の提案を行った。

1) アクティブ・ラーニングを導入した授業

担当教員は5コマを担当し、アクティブ・ラーニングを導入した授業を行った。内容については以下のとおりである。

- ① 課題を解決するためのアプローチと課題解決策の作成方法の解説（特に、仮説思考と論理的思考）
- ② PBLでの課題解決策の取り組み内容に対するコメントとその具体的な指導
- ③ プレゼンテーションの効果的な発表と発表資料の作成方法の解説
- ④ グループ討議やグループワークの解説と実践、等

さらに、授業時間外でも課題解決策の指導を各チームにメールで行い、それを共有することで課題解決策のレベルアップ・ブラッシュアップをはかった。

また、前年度に行った「奈良県下の地方自治体の人事担当者インタビュー」をまとめ、地方自治体の職員として求められる人材像に近づくための授業内容とした。これにより、学生達は地方創生が喫緊の課題とされている今だからこそより強く求められる公務員像について把握し、今の自分に欠如・不足している力を補うための指針を示した。



写真1 PBL 課題発表



写真2 グループワークの取組内容の発表

2) 課題内容と課題解決策の作成

PBLは奈良県内の4社の理解・協力を得て行われた。4社には、①学生チームの受け入れ、②経営課題の提示、③学生チームが考える課題解決策に対する指導行って頂いた。

表2 PBL 受入企業とその経営課題

	社名とその会社のホームページ	受入の人数	出題された経営課題
1	奈良交通株式会社 https://www.narakotsu.co.jp/	12人 (4チーム)	あなたは奈良市の三条通りにある土産物店の店長に就任して、このお店の収支改善を命ぜられた。お店の改善(取扱商品・販売方法・ディスプレイ)を図るとともに、新商品(目玉商品)を開発し、その販売方法を検討することなどを通して、どのようにお店の収支改善を図るのか提案すること。
2	ホテル葉風泰夢 http://www.nara-halftime.com/	12人 (4チーム)	外国人観光客に奈良で楽しく過ごしてもらうためには、どのように情報を伝え、発信すればよいか提案すること。
3	社会福祉法人ぷろぼの https://probono.vport.org/	11人 (4チーム)	日本の人口が減少し、地方から都市に人口が流出している中、地方で生き生きと活動する人を増やすためにはどうすればよいか提案すること。
4	一般社団法人吉野ビジターズ ビューロー http://yoshino-kankou.jp/	12人 (4チーム)	地域経済分析システム(RESAS)を使用して分析を行い、東大寺周辺～奈良公園のエリアで、11月のオーバーツーリズム状態を解消する提案をすること。

(順不同)

4社は、第2回目の授業で、学生チームに「企業の概要説明」「課題の提示と説明」「その課題を解決するための専門的知識の提供と解説、参考情報の提供」を行った。なお、各課題はPBL教育用にアレンジされたものである。

学生チームは10月中旬までに希望するPBL受入企業を選択し、与えられた課題の解題を行うため、何をどう解決するのか等の大枠を打ち合わせた後、求められている内容と盛り込もうとしている内容がマッチしているか否か等の相談を行った(第1稿作成作業)。第6回目と第7回目の授業で、課題解決策の作成の進捗報告(中間報告)を行い、企業担当者からいただいたコメントに基づいて加筆修正を行った。(第2稿作成作業)

担当教員はメールでの指導に加え、第11回目と第12回目の授業でそれぞれ異なる観点から課題解決策の指導を行った。その結果、学生チームは、より多角的な視点から検討を進めるようになった。学生チームは「解決策が課題に対して確実に答えられているか」や「現時点での解決策の有効性」を自己点検して、必要に応じて、さらなる文献調査やチーム内議論を行い、1月上旬に完成稿(第3稿)を提出した。第14回目と第15回目の授業では、課題解決策の最終プレゼンテーションを行い、4社から講評をいただいた。

これらの課題解決策の成果は、後述する「成果の社会的還元(地域貢献)について」において改めて記述する。



写真 3 11/13 PBL 中間報告



写真 4 1/15.22 PBL 最終報告

3) ゲスト講師による講義

奈良県の各分野で活躍中の6名を講師として招聘し、個々の仕事内容や経験を踏まえた講義が行われた。

令和元年10月16日、本COC+事業で連携している奈良女子大学やまと共創郷育センター特任教授・前川光正氏より「奈良の今を知る① 奈良県経済の現状と奈良県内で活躍する企業」をテーマに講義が行われた。

奈良県経済の現状と特長について、“1%経済”（日本のGDPの約1%が奈良経済の力であること）や“貨物列車が走らない”（物流は陸上のトラック輸送であり、名古屋・京都・大阪の大都市圏をダイレクトに結ぶ国道や高速道路を使えば貨物列車より輸送力があること）等のトピックを紹介しながら解説された。また、奈良県内の多数の魅力・活力のある企業について紹介され、奈良で働くことのすばらしさについても言及された。



写真 5 講演者：前川光正氏



写真 6 奈良の今を知る①

<学生の感想>

- ① 奈良の経済の現状がよく分かった。確かに、貨物列車は走っていないが、トラック輸送で大都市圏に物を運べることは奈良の大きなポテンシャルだと思った。また、奈良の経済力が日本全体の1%ということを知り、驚いた。その中で、奈良の企業が活躍していることを知ることができた。
- ② 奈良県内の企業を紹介してもらい、奈良で活躍する企業が多くあることを知ることができたことは今後の就活の参考になった。

令和元年10月23日、柿の葉寿司 平宗（本店：奈良県吉野町）会長・平井直之氏より「奈良の今を知る② 平宗と吉野の歴史、柿の葉寿司が今日に至るまで」をテーマに講義が行われた。

講演の前半では、「なぜ、吉野町で柿の葉寿司が誕生したのか」や「吉野町の桜は山林王と呼ばれた土倉庄三郎氏が中心となって保護していたこと」について解説された。後半では、奈良の3大名物である“大仏・鹿・柿の葉寿司”のひとつである柿の葉寿司に関して、平宗の広告や販売方法、他の柿の葉寿司製造会社との連携などに言及しながら、その普及に努めていることについて紹介された。



写真7 講演者：平井直之氏



写真8 奈良の今を知る②

<学生の感想>

- ① 柿の葉寿司をおいしく頂いた。とてもおいしかった。“奈良に旨いものなし”は間違いだと分かった。また、柿の葉寿司の歴史や販売方法を詳しく知り、“売れ残った柿の葉寿司はその日の内に吉野川に捨ててしまえ”という程の品質管理はおお客様の口に入るものだから徹底していることに感銘を受けた。
- ② 柿の葉寿司を頂き、その味を知った。柿の葉に殺菌効果があるということは知っていたが、食べたことがなかったので、体験できてよかった。味や品質管理の厳しさから奈良の名物になったことは理解できたとし、今後も名物として普及していくと思う。

令和元年10月30日、公益社団法人ソーシャル・サイエンス・ラボ理事・田中俊行氏より「奈良の今を知る③ 公益社団法人ソーシャル・サイエンス・ラボの活動を通して知る地域活性化」をテーマに講義が行われた。

講演前半では、同法人の取り組みである、奈良県安堵町、及び本学東隣に位置する船橋通り商店街での地域活性化の研究と実践について話された。安堵町での活動については、同町出身で日本を代表する陶芸家である富本憲吉関連の芸術分野の活動や、英語パフォーマンス甲子園の活動について紹介があった。船橋通り商店街に関しては、カフェこよみのオーナー・藤田洋子氏と船橋通り商店街協同組合理事長・横田好弘氏による商店街の取り組みの現状について、商店街で行われている華道を通しての伝統的日本文化の研究、事業者向けの経営支援事例などを紹介された。後半は、田中氏のこれまでの活動を振り返りつつ、人とのかわりについて述べられた。特に、講師自身が大手証券会社で新規顧客の開拓を行っていた経験を踏まえて、相手（地域の人々）が求めていることを最優先に考えつ

つ、いかにリーダーシップを取って貢献するかについて説明があった。



写真 9 講演者：田中俊行氏



写真 10 奈良の今を知る③

<学生の感想>

- ① フィールドワークでは、地域の人々と話しあいながら活動することになるが、地域の人々が求めることを一緒にする大切さを学んだ。教えて頂いた通り、まずは相手の要望を優先し、地域の人々の話をよく聞くことを大切にしてフィールドワークを行いたい。
- ② 新規顧客の開拓は大変だと思う。地域活性化を安堵町や商店街で取り組んでいることもすごいと思った。リーダーシップの取り方はチームのために貢献することが重要だと教えて頂いたのは今後の就活に活かしていきたい。

令和元年 11 月 20 日、奈良県下市町総務課課長補佐・松原正城氏より「奈良の今を知る④ 地方創生の時代に求められる公務員とは？」をテーマに講義が行われた。

講演前半では、下市町で取り組んでいる「らくらく農法」や「下市町『元気印集落』事業」「援農プロジェクト『シモイチナジカン』」などを例として、下市町の現状について解説があった。後半では、「知識・創造・人脈・経験・思い」という 5 つのキーワードを挙げながら、これからの公務員に求められることについて説明があった。また、これからの公務員は、法律や ICT、国県や地域の事情・情勢、データ（内閣府の RESAS を使った情報分析）を常に情報収集して学び、先進事例を取り入れ、何でもやって町を活性化することが重要になるとの指摘もなされた。公務員を目指す学生のみならず、その他の学生にとっても自分自身の今後の学びについて刺激が与えられる内容であった。



写真 11 講演者：松原正城氏



写真 12 奈良の今を知る④

<学生の感想>

- ① 下市町の取り組みは非常に興味深く、地方創生の時代にこうした取り組みは非常に良いと思った。大阪に出ていった元町民に対して、生家の柿の木の手入れををお願いするのはありだと思った。大阪は日帰り可能なエリアだし、生家のためになると思った。
- ② 古民家を改装した“移住お試しの宿”というのは良いアイデアだと思った。移住は本当にそこに住んでいいのかと不安に思うので、何泊かして下市町を知るのは良い。特に、宿泊者としてではなく、移住を考えている町民・生活者としてそこに長時間滞在するという事は良いことだと思う。

令和元年 11 月 27 日、奈良県十津川村総務課長・玉置広之氏より「奈良の今を知る⑤ 地方創生時代に求められる地方公務員とは？～その職務・職責・人材像～」をテーマに講義が行われた。

十津川村の概要と地域資産（谷瀬の吊り橋、源泉かけ流し温泉等）についての紹介の他、平成 23 年の台風 12 号による紀伊半島大水害についての説明があった。特に、「治水」も大事だが、「治山」も大事であり、森林の持つ保水力が大雨や台風の時に川の水量を減らすことに役立っていることを知ってほしいと語られた。また、十津川村産の木材を使用した復興住宅の建設や、村民の助けあい・支えあいによって村での暮らしの継続を図る「高森のいえ」構想などについて紹介があった。加えて、十津川村の過疎化を少しでも食い止めるべく、移住促進や温泉を使った健康増進に取り組んでいること等について説明された。



写真 13 講演者：玉置広之氏



写真 14 奈良の今を知る⑤

<学生の感想>

- ① 十津川村が水害にあったことは他の授業で聞いていたが、被害はとても大きいことが分かった。復興のために十津川村の木を使って復興住宅を建てたり、道路を整備したり、治水や治山をしていることも分かった。地元を元気にするには、災害から復興することが大切だと思うので、その取り組みを知ることができて良かった。
- ② 十津川村が「高森のいえ」構想で社会保険に跳ね返らないように取り組んでいることはすごいと思ったし、十津川村の雑穀や木を使った取り組みも十津川村の産品で地域活性化に繋がると思った。地方創生の時代は、こういったことからコツコツとやっ

ていくべきだと思った。

令和2年1月8日、奈良工業高等専門学校・竹原信也准教授より「奈良の今を知る⑥『地域』を営む～地方自治・まちづくりの基礎知識」をテーマに講義が行われた。

地域の課題を解決するには法・地域・政策という学問領域の考えも必要になることから、まず、「地域社会の重要性」を法律・地域政策の観点から説明し、地方自治に関する基礎知識を説明された。次に、「地域」という言葉がマジックワードであり、多義的なので、どう地域政策に活かすかについて説明があった。その後、竹原氏から出題された「自ら地方自治を行うならば、どのような地域をデザインするか」について、地域住民の意識の変化や時代の流れに注意しつつ、グループワークを行った。地域に求められている役割や住民の意見に寄り添った地域の運営などの観点に留意しながら議論し、最後に各チームがそのデザインを発表し、竹原氏から講評を得た。



写真 15 講演者：竹原信也氏



写真 16 奈良の今を知る⑥

<学生の感想>

- ① 地方自治の基礎知識となる二元代表制や地方公営企業法等を1年次の今から学べて良かった。地方活性化に興味があり、それには地方自治の基本を知る必要があると思っており、分かりやすく教えて頂いた。チームでした地域デザインは自分達の「地域にあったら楽しいので、それが欲しい」と思う施設・サービスだけでなく、地域住民が必要とする施設・サービスも考えるべきだと知ることができた。
- ② 地域をデザインするグループワークが楽しかったし、勉強になった。自分達が必要と思った施設をどこに配置するか、駅を中心にして人の流れを考えて・・・と考えていくうちに、「自分が住みたい町はこういう町なんだ」と思う反面、「それを実現するには法律や用地買収等の問題があって、地方自治ではこれらをクリアしてまちづくりをしているんだ」と思い、地方自治の町のデザインに興味を感じた。

以上の取り組みにより、学生はグループ討議やグループワーク、プレゼンテーション等の技法について学習し、その結果、自分の考えを言葉で正しく伝えるコミュニケーション能力が育成された。さらに、奈良県内の企業が抱える経営課題の解決策を考察・発表することで地元企業を深く知る機会を得るとともに、課題発見・解決能力等を養うことができた。また、ゲスト講師による講義では、奈良県内の地方公共団体・企業等の現状や求めら

れている人材像について、理解を深め、地元で働くことに興味関心を持ち、魅力を感じ取ることができた。

(2) ピア・キャリア・サポート

ピア・サポートとは仲間同士（peer）の助け合い（support）を意味しており、ピア・キャリア・サポートは、進路について学生が一人で悩まず、自身の将来にさまざまな可能性を見いだせるように学生同士で刺激を与え合う団体を目指してきた。また、ピア・キャリア・サポートが提示する「さまざまな可能性」の1つとして、奈良での就職を積極的に掲げ、その特徴や魅力を学生自身で探る活動を行ってきた。具体的には、学生自らが奈良を中心とする地域で活躍する社会人から自身の将来のロールモデルを探り、その社会人像を他学生と共有するものである。

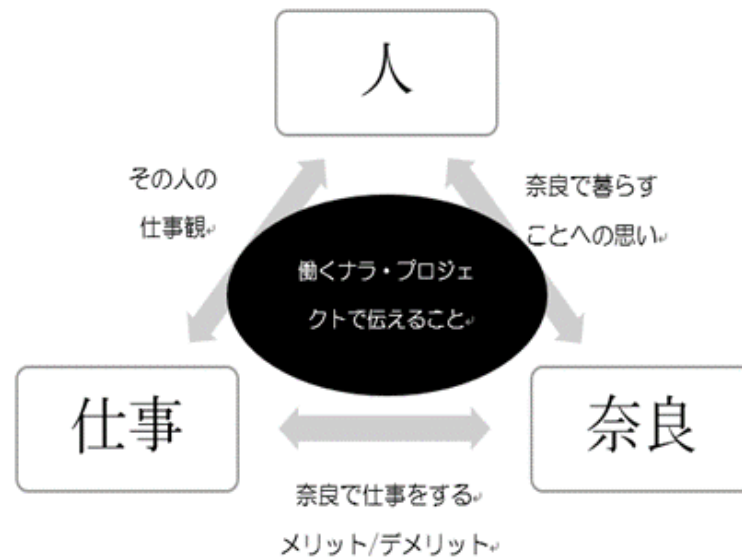


図1 働くナラ・プロジェクトで伝える情報

この活動は「働くナラ・プロジェクト」として現実化してきた。「働くナラ・プロジェクト」とは、奈良で実際に働いている社会人に学生自らがインタビュー調査をし、奈良で働くことになったきっかけ、奈良で働いている理由について聞き取る取り組みである。学内の他学生にも広く情報を共有するために、聞き取った内容をもとに壁新聞形式で成果物を掲示している。このプロジェクトでは、「働くこと」をより広い角度から捉えており、仕事の話のみならず、通勤や昼休み、休日等のプライベートなど、ワークとライフの両面でのアプローチを採用している。

令和元年度は新しい試みとして、5月13日に「先輩に聞く－留学体験談」と題するイベントを学内で開催した。文部科学省の「トビタテ！留学 JAPAN」に採択され、オーストラリア

のサザンクロス大学に半年間留学していた学生が「講師」となり、留学体験を紹介するとともに、留学がどのように自分たちのキャリアと結びつくのかについても在學生とやり取りを行った。

留学によって精神面が鍛えられ、辛いことがあってもそれが当たり前と思えるようになり、悩むことがなくなったことや、きちんと自分の意見が言えるようになりポジティブに生きるようになったことなどが留学体験者から紹介された。また、そもそも大学生のあるべき姿は勉学を楽しいと思えることと、そして好きなことに何でも取り組むべきであることを学んだことから、キャリアに関しても積極的には考えるようになったとして、留学のメリットについても報告された。

同イベントでは、ピア・キャリサ・サポートの活動も紹介され、その結果2名の新規メンバーの獲得に至った。



写真 17 留学体験からキャリアについて語る学生

もうひとつの新しい試みとして、これまでの活動は学外に学生が出かけて行って社会人にインタビューすることが中心であったのに対して、学内に奈良で働く社会人を招いての交流会を11月28日に実施した。奈良市に所在する亜細亜交流旅行より、代表者の高橋辰氏に来学いただき、旅行業務の基本事項、ご自身が旅行業に携わるようになった経緯、これまでの旅行業務の経験などについて、座談会形式にて詳しくお話をうかがった。高橋氏は大手旅行会社勤務の後に、奈良県下で自ら起業された経験を有しており、「働くナラ・プロジェクト」の趣旨に照らしてとても有意義な機会となった。

また、高橋氏は10月24日から27日までインテックス大阪にて開催された「ツーリズムEXPO ジャパン 2019」において、奈良県下の企業による合同出展ブースの取りまとめをされていたが、これにメンバーの一部が参加し、世界規模の観光イベントにおいて、奈良を世界に売り込む活動の一端を担った。奈良という立場から旅行業界に接する貴重な経験となった。

(3) 連携校への出講

連携校名と出講の授業名は、奈良女子大学は「なら学+（プラス）」、奈良工業高等専門学校は「地域と世界の文化論」である。奈良女子大学には令和元年10月8日に1コマ、奈良工業高等専門学校には令和元年6月11日と同月18日に2コマを本学教員が担当した。

奈良女子大学の1コマと奈良工業高等専門学校の1コマは「人々との共創が織り成すコンテンツツーリズム」と題して増本貴士特任准教授が担当し、観光学のアプローチから、コンテンツツーリズム（アニメや映画等の映像・コンテンツを視聴した人が観光行動を起こし、その舞台地である地域を訪問・探訪して消費行動をして地域振興を目指すこと）について、事例研究を踏まえて講義を行った。事例研究では、担当教員が主催者の1人となって開催したコンテンツツーリズムのイベントを紹介した。「舞台地に住む地域の人々」、「全国から参加するファン」、「主催者（運営側）」の3者がその場所や作品を大切にしつつ、お互いの活動を尊重・慮りながら、イベントを成功させるべく共に創り上げ、持続可能なこととして取り組んで行くことを述べた。さらに、地域や主催者の作ったものがファンに消費され、そのうれしさを地域や主催者だけでなくwebで世界的に伝えることで、「次も、ぜひ一緒に」と思わせて持続可能な状態にすることが最重要であると述べた。

奈良工業高等専門学校のもう1コマは「観光と地域の関わり合い」と題して薬師寺浩之准教授が担当し、世界中から訪日観光客（インバウンド）が年々増加している昨今、「そもそも観光とは何か」や「観光と地域とはどのように関わり合うのか」に関して、各地域で起こっている具体的な事象を織り交ぜながら幅広く講義をした。